



▲川内原子力事業所 諸正事業所長(中央)を中心にたくさんの社員の方にお話を伺いました

—— 今回の取材にご協力いただいた皆さん ——

川内原子力事業所
 諸正謙治事業所長
 井上浩明事務次長
 森田安彦技術次長
 茶園孝生新規制基準設備対応PJリーダー
 松永繁志チームリーダー
 江島 武チームリーダー
 堂免高志さん(専任安全管理者)
 辻原直之主任(労働組合鹿児島支部委員長)
 玄海原子力第二事業所
 磯部秀雄さん(川内原子力事業所 前技術次長)
 監査役室
 今村弘文室長(川内原子力事業所 前管理次長)
 (所属・役職は平成27年11月取材当日)

現場最前線!! 特別座談会

お客さまや、共に工事を乗り越えた協力会社の皆さま等に向けて、感謝の気持ちを語っていただきました。

——工事が膨大で大変だったとお聞きしましたがお客さまとの関係はどうでしたか？

「とても良好でした。私たちの意見を真摯に聞いてくださったり、互いに知恵をだしあったり。再稼働という目標に向け、一体となって作業に取り組むことができたので、大変な時期も乗り越えることができたと思います」

「当初は、発電所の状況が分からないことも多かったのですが、いろいろな場面で九州電力殿から丁寧に説明していただき、また、声をかけてくださったりして、工事関係者のモチベーション向上につながったと思います」

——印象的だったエピソードはありますか？

「九州電力殿には私たちの朝礼で定期的に訓話をしていただきました。また、焼肉会等の懇親会にも参加いただき、工事の状況説明や激励の言葉をいただきました。私たちにとって、とても励みになりました」

——厳しいことを言われたこともあったのでは？

「中には厳しいこともありましたが、お互いに意見を出し合って調整しながら作業を進めさせていただきました。また、大変なのは九州電力殿も同じで、一生懸命に仕事されている場面を見て、私たちも頑張らなと、と思いました」

「作業を効率的に進めるために、様々な提案もしました。例えば、ピーク時は従事者の数が多くて発電所への入門に時間がかかるため、九州電力殿にも協力して

いただき、作業開始の時間を早める等、効率良く作業ができる工夫をすることができました」

——協力会社の皆さんはどうでしたか？

「協力会社の皆さんは、よく動いてくれました。仕事に取り組む姿勢が素晴らしく、そんな姿に私たちも引張られ、互いに高め合う良い関係になれたと思います。協力会社の方々がいるからこそ、当社がある。そう思います」

「当社と協力会社との信頼関係には、九州電力殿からもお褒めの言葉をいただきました」

——最後に、今だから思う工事完遂の秘訣は何ですか？

「何よりもお客さま、当社、協力会社等、関係者間のコミュニケーションと信頼関係だと思います」

「ズバリ、一人ひとりのマイプラント意識ではないでしょうか。工事関係者のモチベーションをうまく保つのは難しかったですが、様々な工夫をしながら、一致団結して再稼働を目指すことができました」

「本店、各現業機関の皆さんにもたくさんのご協力をいただき、ありがとうございました」

～川内原子力発電所再稼働への道のり～

平成 23 年 3 月、東日本大震災・その後の東京電力(株)福島第一原子力発電所事故の発生により、原子力を取り巻く社会環境は一変しました。九州電力(株)川内原子力発電所もその影響を受け、平成 23 年 9 月以降の運転停止から約 4 年の時を経て、平成 27 年 8 月に 1 号機が、また、10 月には 2 号機が再稼働しました。

今回は関係者への取材に基づき、川内原子力事業所がお客さまと一体となり、厳しい新規制基準対応工事に取り組み、発電所再稼働を迎えるまでの道のりについて紹介します。

再稼働に向けた一歩

川内原子力事業所は、新規制基準対応工事を一貫して施工し、再稼働に向けての重要な役割を担ってきた。当初、その道のりは「ゴールが見えない」と言われたが、社是に掲げる「誠実な施工」をモットーに業務を遂行した。

平成 26 年 3 月、同発電所が新規制基準適合性審査の優先プラントに選定されたことで、ようやく工事は本格化した。その物量は凄まじく、所員はただ目の前の工事に懸命に取り組むことしかできなかった。

お客さまからの要望に応えるために

工事が進むにつれ、配管などの耐震補強や津波対策、火災対策、竜巻対策など、次々に新たな課題が発生。膨大な量の工事に加え、性急な工事の着工や工事仕様の変更による後戻り作業、やり直し作業などが、幾度となく繰り返された。このような状況でも、「お客さまからの要望に何とか応えよう」と所員は協力会社と共に懸命に取り組む、工期を守るためにお客さまと工事の優先順位や作業手順などについて綿密に調整した。作業の効率化にも徹底的に取り組んだ。



▲電源ケーブル敷設工事

膨大な工事の中で

今回の新規制基準対応工事は、過去に経験した工事量をはるかに上回る膨大なものであり、工程も未確定、且つ、短期間で施工を求められた。中でもハロン消火設備工事は、配管の全長が約 2 万メートル、溶接リングの数は 2 万箇所を超えるほど大規模な工事であった。



▲溶接箇所が2万箇所にも及んだハロン配管溶接作業

また、火災防護対策工事では、建屋内に消火設備を大量に設置しなくてはならず、そのために組んだ足場は天井を覆いつくすほど。今回の工事では、特に足場材の数(総数約 248,000 点)が全く足らずに約 1/3 の(約 77,000 点)を社外からのリースで対応することに。

また、その他の機材や工具も全国各地から大量に調達することで対応したが、工事関係者の要員不足についても、電気系、機械系、放射線管理などの職種垣根を超えて応援を行い施工した。

さらに、溶接作業は同業他社である東北発電工業(株)、東京パワーテクノロジー(株)、(株)中部プラントサービス、四電エンジニアリング(株)の溶接士の方々にも応援をいただいた。

コミュニケーションの大切さ

同発電所が審査の優先プラントとして選定されてからのピーク時には、一気に工事量が増大し、当社の工事要員数は協力会社と合わせて 1,600 名を超えた。

通常の定期検査の工程は 3 か月程度だが、今回の工事では膨大な工事量と長い工程に慣れていない工事関係者も多く、発電所の再稼働が見えそうで見えない状況に、モチベーションの低下が懸念された。そのフォローとして、一番負担がかかる作業責任者クラスに面談を行ったり、管理職による声掛け等、可能な限りのコミュニケーションを心掛けた。

また、協力会社からの要員もピーク時には 39 社、約 1,000 名となり、多大な協力をいただいた。安全衛生協会鹿児島地区部会会長である(有)小倉鉄工所の小倉和徳社長は「人材集めも苦労したが、実際に足を運んで作業員一人ひとりと直接話をすることで理解してもらった。あれだけの大きな工事を完遂できたのは、全員の高い意識のおかげ」と当時の状況を語る。



▲小倉鉄工所 小倉和徳社長

安全最優先で

工事関係者が多い中で、特に気を使ったのは「安全」。作業に追われていると、安全をおろそかにしてしまう可能性も。一度災害が起ると工事がそこで止まってしまう、更に作業が遅れる原因にもなるため、パトロールの時に厳しい指摘をすることもあった。「絶対に怪我をさせない」という強い思いで毎日パトロールを行い、安全最優先に努めた。



▲約1,600名にも及んだピーク時の朝礼

また、特に夏場の熱中症対策に発電所全体で取り組んだ。構内には、工事関係者共通の休憩用のテントが張られるなど、発電所内の様々な会社が一体となって過酷な環境での工事を乗り越えることができた。

1 つになった、それぞれの思い

新規制基準対応工事は、全国初の試みということもあり、大きな注目を集める中での施工となった。そんな大きなプレッシャーにも負けずに「当社も川内原子力発電所の再稼働を通して電力の安定供給に貢献したい」という信念のもと、経営層や他部門も一体となって全社を挙げて支援した。

また、再稼働への強い信念を持っていた故・中野事業所長*の思いは、多くの所員に引き継がれ、大きな原動力となった。そして、当社だけでなく、お客さま、メーカー、協力会社など発電所従事者が一体となって、同発電所のスローガン「一致団結、総合力」の言葉を胸に新規制基準対応工事に取り組むことで、川内原子力発電所の再稼働を果たすことができた。
 *中野俊輔氏 平成 22～26 年の間、川内原子力事業所長を務める。平成 26 年 3 月ご逝去。